



心を繋ぎ、『信頼』を育む

校長 関 勝 志
第60回卒業式は感動のフィナーレとなりました。コロナ禍以降の卒業式は、密を避けるため、在校生は2年生の代表生徒のみが参加する形で行って参りましたが、今回は2年生全員が式に参加し、1年生は全員が校庭での歓送から参加して、卒業生を温かく送り出しました。

卒業式では、在校生を代表して2年生の浅川さんが、先輩たちとの思い出や感謝の気持ちを話してくれました。そして、卒業生は、中学校生活で築いた仲間との『信頼』のこと、そして支えてくれたすべての人たちへの感謝の言葉を綴り、心のもった素晴らしい歌声を響かせました。

卒業生が大切にしていた『信頼』とはどういうことでしょうか。信用という言葉もありますが、少し違います。信用とは、過去の実績のことです。例えば、時間に遅れないことや、約束を守ることなど、こうした積み重ねが信用となります。目に見える客観的な事実が信用の根拠（裏付け）となっています。これに対し、『信頼』とは、根拠がなくても、きっと期待に心えてくれる、力になってくれる、と未来を信じること、その人の可能性や人柄を信じて頼ることです。目には見えない心の繋がりが『信頼』を育みます。1・2年生にも、そんな信頼し合える仲間やクラス、学年をつくってくれることを期待しています。

小平四中にはカルガモ教室があります。大勢の人がいる場所が苦手だったり、人前に出ると緊張して疲れてしまったりするなどの理由から、クラスでの生活に不安を感じたときにクラスを離れて学習できる場所です。また、苦手を克服するための支援を受ける場所として、一橋教室があります。利用している一人の生徒が話してくれたことがあります。「クラスに戻るとみんながお帰りと声をかけてくれるんです」と笑顔で話してくれました。『信頼』できる仲間がいて、いいクラスだと確信し、とてもうれしくなりました。

『卒業生を送る言葉』 在校生代表 浅川晴子

春のあたたかな空気が漂い始めている本日、卒業生の皆さんが新たな門出を迎えられます。

皆さん、ご卒業おめでとうございます。在校生を代表して、心よりお祝い申し上げます。たくさんの思い出を作ったであろうこの四中の校舎とも、お別れが近づいてきています。私たち2年生は、この体育館で行われた入学式で初めて、皆さんの合唱で四中の校歌を知りました。今でこそ、私たちが校歌を歌うことは板についていますが、最初は皆さんの一歩成熟した歌声に目を見張った記憶があります。あのとき、違和感なく制服をまとう先輩方に、少しの緊張と眩しさを感じました。

入学してから、私たちはずっと皆さんの背中を追いかけてきました。例えば、運動会。全校練習のとき、統率のとれた皆さんの行動に差を感じざるをえませんでした。近くで先輩方を見たことで、私たちも自然と運動会を良いものにしたいと考えることができるようになりました。当日、先輩方は白熱した競争を行い、誰もが見入ってしまうような充実した運動会を作り上げてくれました。

合唱コンクールでも、皆さんは堂々と完成度の高い合唱をしていました。「来年は先輩たちのような素晴らしい合唱をしよう」と、クラス全員で誓い合ったものでした。今年度の「大地讃頌」は、皆さんの歌声がホール全体に響き合い、最後の音の余韻までもが、最高学年としての風格を表していました。聴き終わった後、私の心は感動で満たされていました。

行事だけでなく、部活や委員会など普段の生活でも、お世話になった先輩がたくさんいます。私たちは、入学してから学校生活の多くの場面で助けていただきました。皆さんは、いつまでも私たちの憧れであり、目標でもあり、尊敬する先輩です。私たちは、いつまでも皆さんを心から応援しています。

最後に、皆さんの卒業後の更なるご活躍をお祈りし、贈る言葉とさせていただきます。

『巣立ちの言葉』 卒業生代表 野口咲弥子 松本咲乃 寺島瑠奈

教室の窓から見える景色も、春の色に染まり、たくさんの思い出が詰まったこの学校から、巣立つ日を迎えました。なじまない制服を着て、自分の足音さえ落ち着かなく感じた、入学式。静まり返った体育館に、名前が呼ばれ、返事をする自分の声が、高い天井に、吸い込まれていくような、独特な静寂。そして、さらに深く印象に残っているのは、私たちに注がれていた、少し怖いぐらいの先輩方の視線でした。しかし、あの時に感じた怖さは、驚きへ、そして、憧れへと、変わっていきました。

入学してまもなくの、対面式。委員会や部活動を紹介する先輩方の、堂々とした姿やパフォーマンスを目の当たりにしました。入学式で感じたあの鋭さは、誇りと、真剣さから生まれる、強さだったのです。同時に、私たちの学校生活への期待も膨らんでいきました。

迎えた、中学校最初の運動会。「いかだ流し」では、仲間の背中の上を一歩一歩慎重に、素早く駆け抜けました。不安定な土台の上で、必死に踏ん張る仲間の震えが足の裏から伝わってくる。ただ「楽しむ」だけの行事から、「本気で挑む」場所へ。この経験が、その後の私たちの歩みを支える原動力となりました。

十月。冷え込み始めた音楽室で、私たちは合唱コンクールの練習を始めました。「どうして合わないのか」「なぜ真剣にやらないのか」。何度も立ち止まり、壁にぶつかりました。それでも、放課後の教室に響くピアノの音や、指揮者の動きに導かれ、私たちは、一つのハーモニーを作り上げました。本番、緊張で震える足を必死に抑えて立ったステージ。見えた景色は、私たちに「心をつなぐ喜び」を教えてくださいました。

一月、私たちは白銀の斜面に立っていました。スキー教室という、大きなチャレンジです。重いブーツに戸惑い、思うように動かない板に苦戦し、最初は立ち上がることもできませんでした。すねの痛みや、度重な

る転倒には、心が折れそうにも、それでも諦めずに滑って、宿舎に帰っていただいた豚汁は、いつもより何倍も温かく、心に染み渡る美味しさでした。

二年生の都内めぐり。慎重に立てたはずの計画も、当日は予定通りにいきません。スマートフォンの画面を囲んで顔を見合わせ、途方に暮れた瞬間もありました。乗り遅れた電車、反対方向のホーム、見学できないほどの行列。そんな焦りの中で交わした言葉の一つひとつが、**お互いへの信頼**を深める確かな手応えとなりました。たどり着いた目的地で撮った写真には、少しでも大人びた私たちの笑顔が写っていました。

私たちの中学校生活には、行事とともに、放課後のチャイムで始まる「もう一つの日常」がありました。校庭を駆けるスパイクの音、体育館に響くボールのはずみ、校舎に響く楽器の音色。それぞれの部活動の一員として、目標を共有して同じ高みを目指す時間です。バラバラだった個人の力が、ある瞬間重なり合い、自分でも驚くほどの力を出せる。私たちは、一人では決して届かない場所があることを知っています。そして、結果以上に、私たちの手元に残ったものがあります。それは、一緒に練習に励んだ時間であり、かけ合った言葉であり、最後まであきらめなかったという誇りです。切磋琢磨し、支え合ってきたこの時間は、私たちにとって何物にも代えがたい財産となりました。

三年生になった私たちの出発点。それは、あの燃えるような太陽の下で走り抜けた運動会でした。「歴代一の運動会にしよう。」実行委員長が掲げた言葉に学年全員の心が突き動かされました。ただ勝敗を競うだけでなく、最高の思い出を自分たちの手で作り、見る人を感動させる。そんな決意を持って挑みました。全力でぶつかり合う、本気の勝負。その激しさの根底にあったのは、**仲間への確かな信頼**でした。ムカデ競争、苦しい時にふと前を見れば、同じように限界に挑む仲間の姿がある。バトンを渡す瞬間、言葉はなくても「お前に託したぞ」という思いが伝わってくる。勝利の笑顔も、惜敗したチームへの温かい拍手も、すべては私たちが積み重ねてきた**「互いを信じる力」**から生まれたものでした。そこには「敵」として戦いながらも、同じ「三年生」として最高の舞台を作り上げようとする、結束力がありません。

合唱コンクール。学年合唱の「大地讃頌」。ホールに響き渡る、大地を震わすような低い声と天に抜けるような高い声。それは、4パートそれぞれが互いの声を聴き、重なり合って生まれた一つの歌声でした。指揮者が礼をするよりも早く、巻き起こった拍手。静寂を待てないほどの感動が、そこにはあったのです。学年全体で作り上げたあの大地讃頌、大地から湧き上がるような高揚感。忘れることのない絆の結晶が生まれた瞬間でした。

その絆をより強くしたのが、共に過ごした修学旅行でした。川越校外学習、都内めぐりと一歩ずつ歩んできた私たち。修学旅行はその集大成でした。学校という日常を離れ、3日間、寝食を共にしたあの時間。教室の机に座っているだけでは見えなかった、仲間の新しい一面を知ることができ、私たちの心の距離はぐっと縮まってきました。しかし、この旅の真の目的は、単に思い出をつくることではありませんでした。この経験を学校行事だけで終わらせず、「学級目標に活かす」という強い思い。それは次にやってくる『受験』という大きな壁を全員で乗り越えるためでもありました。

十一月。私たちは、本格的に自分自身の未来に向き合う受験生となりました。周りの様子に焦った時間、模試の判定や点数から不安を感じた時間。それでも、この1問だけ解こうと諦めなかった時間。夜、一人で机に向かっていると、時折、暗闇に取り残されたような心細さに襲われることもありましたが、しかし、毎朝教室に入れば、そこにはいつも通りのクラスがありました。おはよう、と声をかけてくれる。しょうもない話で笑わせてくれる。「絶対大丈夫」と言ってくれる。そんな仲間の存在に、私は助けられました。「一人でも独りじゃない。」孤独ではないと教えてくれた先生の言葉に、私は助けられました。

どんな人生を歩むのか。正解のない問いに向き合い続け、出口のない迷路を彷徨った冬。その険しい道のりの果てに、今、ここには穏やかな春の陽だまりが広がっています。ここまでともに歩んだ仲間たちへ。私たちを支えてくれた先生方へ。誰よりも近くで、誰よりも遠くから、私たちを信じ抜いてくれた「あなたへ」伝えます。

私たちは今日この日に、小平四中を卒業し、それぞれの道を歩み始めます。振り返れば、数え切れないほどの苦楽の思い出が積み重なった、三年間の中学校生活でした。共に歩み、過ごしてきた仲間、友人たちとの別れは、名残惜しく、寂しくも感じられます。私たちがここまで友人を大切に思い、別れを惜しめるのは、一人一人が、「クラスメイト」から**「信頼し合える仲間」**に変化して行ったからだと思います。そして私達の間には芽生えた信頼は、私達の前に高く、厚くそびえ立った受験という壁さえ、乗り越えるかけがえのない力となりました。

「別れの数だけ出会いがある。」私は、「別れの数より出会いがある。」だと思います。進学先やその先の社会生活には、これまでよりも遥かに多くの出会いが待っています。その関係性を一から築いていく中で、**小平四中で学んだ信頼**の重みを心に留めて過ごしていきます。慣れない環境で不安を抱き、時には小平四中に戻りたい、そう願うこともあるかもしれませんが、しかし、この三年間で揺るぎのない信頼を築いてこられた私たちなら、絶対に大丈夫。新たな仲間や環境の中でも**信頼**と人生の記憶に残る思い出を築いていけるはずですよ。

今日という日を最高の仲間と最高の自分で迎えることができたのは、今まで支えてくださった先生方と家族のおかげです。役立つ授業を考えた先生方、合唱コンクールで、練習の日々を思い出しながら私達の歌声に涙してくださった先生方。私たちがここまで成長することができたのは、時には優しく、時には厳しく、本気で向き合ってくれた先生方のおかげです。三年間、本当にありがとうございました。

ここまで育ててくれた家族の皆。嬉しいときも、辛いときも、悔しいときも、いつも話を聞き、寄り添ってくれてありがとう。今までの十五年間、たくさん反抗してしまっただけで、たくさん笑い合い、いつも私の味方でいてくれてありがとう。毎日の何気ない「いってらっしゃい」「おかえりなさい」や、温かいごはんがどれだけ心の支えになっていたのか今になって強く実感しています。まだまだ、たくさん迷惑をかけるかもしれないけれど、これからもよろしくお願ひします。

まもなく三年間の中学校生活の幕が閉じようとしています。これから私達は、未来に向けて自分の進路を歩んでいきます。この先、大きくそびえ立つ壁に出会っても小平四中での仲間との成長の日々を自信に変え、乗り越えていきます。

在校生の皆さん、小平四中の伝統と私たちの思いはあなたたちに託しました。学年の壁を超えて絆を育み、笑顔のたえない小平四中を守り抜いてください。

私たちは今、広い大空へと飛び立ちます。**未来を信じて。**